

JAXA の月惑星探査推進グループの川口淳一郎プログラムディレクターが資料 20-2(宇宙探査 WS)を説明した後、活発な質疑応答があった。

松尾: 此の後、懇談会でも議題になる。

青江: 京都のときのあれから、一寸記憶が薄れたが、「探査協働グループ」と云う組織が出来たということ？

JAXA 川口: 現在のところは、ワークショップが開かれているという、所謂、有志の集まり、各 14 機関からの有志を以ってワークショップで集まって、(割り込まれる)

青江: ToR、「んーの目的や指針を示した会則」と書いてあるでしょう。会則だとか何とか云うことを言って、それで「事務局」と、こう来るでしょ。云うことは何か組織ができたのかと。

JAXA 川口: そう云う提案がされている訳です。京都のときには、フレームワークドキュメントのディスカッションと並行して、其の当時は、International Coordination Mechanism 国際調整機構ということも議論しており、その発展の形として、国際協働をどうして行くかについて、或るグループを作って、参加国の間で、其れをどのように進めるかという、ある種の会則のようなものを作る動きがある。今回の活動後、事前にはそう云う資料の言及は無かったが、ESA 側から、会場にて、この、ある種の会則に踏み込んだ議論の口火が切られたということ。勿論、会場で提案されたものであり、なんらの合意に立ったものではございません。ホスト側の ESA の動きとしては、そう云う意向を持って進めようとしている。

青江: 日本は、それに対して、まだ、「いいですよ。」とか何とかって云う話はしていない？

JAXA 川口: 日本は、会場で提案されても全く十分な議論は出来ないで、こう云う拙速に動いてはいけない部分があり、参加国も同様な意見であり、此れは、「ESA 側からの提案の(案)」と云うことが示されたという段階で留まっております。

青江: さっき言った、グループというのは、一体全体何なのだということである。どうも良く分からないと言うかネ。組織？<sup>1</sup>

JAXA 川口: 今のところ、その内容が、どのようなコーディネーションをする、或いはコーディネーションの中身とは一体何かと云う事については、実は議論は行なわれていません。従って、会則が先に定められるという、多少奇妙なものになっている。此れは、その旨を、JAXA からも、他の宇宙機関からも意見が述べられて、「実質的な活動が無いのに会則を定めるのは、一般的におかしくないか。」と云うことで、現状では、そう云う「ある種のグループを作りたいという提案が、ESA 側から提示された。」

青江: 要は、グループというのは何なのだと。作る作らないは、これから考えて行けば良いのだと思うが、どうも、何なのですかネ。

JAXA 川口: 其の辺りは、色々な局面が有るかと思えます。それに

---

<sup>1</sup> 質問の主旨が伝わっていない。主導権争いを心配しているのか、高額な費用負担を危惧されているのか、或いはそれ以外に何か有るのか。それにしても、恒久組織を作ることに対し、心配が先行し、無暗に強大なものを想像されているようである。

については調査を致します。また改めて報告させていただきます。

松尾:各エージェンシーのオーソライゼーションみたいなものはなかろうかと云う、やっぱり月へ(割り込まれる)

青江:あの、オーソライゼーション要る要らないの前にネ、此のグループというのはネ、普通一番ブロク(?)に考えられるのは、先ず「組織」と云うものなのか、それともそうではないのか。所謂グループだから、組織というように思えば、日本の法的機能(?)では社団法人みたいなものですよネ。グループメンバーの、其れの結合・集合体としての位置付け、組織体だと。それで、そこに、事務局がある。こういうものが、一種のコショー(?), そう云うものが出来るのか、それとも単なるグループで、場なのか。

JAXA 川口:正に、京都のフレームワークドキュメントと言っている部分の第6章目に、国際調整、協働活動を進める仕方の基本的な意思が書いてあり、其れも14機関が合意しているが、其れは、月探査、或いは大掛かりな「ものの探査というのは、一国で行なう範囲を超えているので、国際協力が必要である。<sup>2)</sup>と云う、認識を書いています。其の認識の下に、どの様に進めるかについては、プログラム・プログラムという言葉もありましたが、カンファレンスの会員をベースにして行く方法なのか、それとも、先生、今仰られたように、事

<sup>2)</sup> 科学者、工学の技術者は、この説明で納得できるのであろうが、青江委員には全く届いていない。小職も掴めていない、青江委員の質問の主旨に対し、答えになっていないのであろう。

務局を設けた組織として整備するののかということが、正に議論しているところで御座います。GEOS といいますか、地球観測のようなメカニズムですと、或る意味常設的な事務局の形になるが、そう云う組織にしていくのか、それとも、所謂 COSPER (国際宇宙委員会) の活動のように、会議ベースで纏めて行くのかという議論は有る。

池上:私の4月の理解では、Coordinationという言葉で「調整」と訳したとたんに、良く判らなくなった。英文で見ると、幾つかの機関が集まって、一緒に協働作業をやる。其れを上手く進めるために、色々話し合う場として、Coordination、何でしたっけ、Meeting<sup>3)</sup>でしたっけ、Coordination 会議が出来た。其の延長ではないのですか。ですから、事務局をがっちり作って、何か提案があって、上手く調整するという、先ず、そう云うような段階では無い<sup>4)</sup>ように理解している。

JAXA 川口:そう云う段階では御座いませんで、ワークショップと呼んでいた、昨年一年間進めてきた活動と云うのは、何等、事務局等有るわけではなく、有志の機関の集まりであった。其処では確認された、Framework Document と言うのが有って、14カ国が最低限合意できる共通理解は何かと云うの

<sup>3)</sup> 川口先生は Mechanism と言っていた。

<sup>4)</sup> 青江委員のご心配が、過大なものではないかと感じている点では小職と同じようであるが、この突っ込みは、青江委員と川口先生の対話の溝を埋める役に立っていないようである。青江委員の発言は無かったが、「そのときになって騒いでもて手遅れになる。」と仰るであろう。

が書かれています。そこでは、「探査」と云うのは、規模が大きくて、国際協働を志向する。」と云うことが書かれています。其の「精神が書かれているところ」で合意は止まっています。其処から先をどう進めて行くのかと云うのが、京都以降最初のワークショップが今回、其処では、具体的な行動は(大勢同時に声を出したので、語尾不明。)

池上:そうですね。そのためのルールを決めると言うのは、何も決めないと、何だか良く分からないから決める位の感じではないか。余り、実体が無いのにルールを決めるのはおかしいという言い方、むしろ、実体が無いのでルールを決めると云う、ある種のガイドラインを決めると云う理解ではないの。一寸、分からない。

JAXA 川口:関連する状況は色々有るかと思うが、一つは、やはり、その、基本的な考え方である、「協働が進めないと、とても規模が大きい」と云うことで、其れを実際にはどういう風に協働していくのかと云うのでしょうか、宇宙ステーション型にするのか、それとももっと違った形にするのか、という考え方がまだ整理されていないと云う処である。

松尾:要するに、ESA から、其の事務局的なものを作ったらどうかと云う提案があって、それに対して各国とも即答は控えたと云う様な状況なのでしょう。

JAXA 川口:はい、そうです。

池上:科学技術という点で、何か、Something New のようなジョウコウ(情報交換を短縮?)は、会場ではやられていたのか。

JAXA 川口:此のワークショップそのもの以外には、暫定的に、直

接、各機関と二カ国間の情報交換を行なわせて頂いた。色々の情報を交換したが、不正確な情報はその場では余り必要ではないかなと(語尾不明)

池上:一応、世の中全体としては、そちらの方向に向かって動いていると云う形?

JAXA 川口:あの一、スチュワート・シャランノ(?)は、(割り込まれる)

池上:いやいや、宇宙探査。

JAXA 川口:ポストISSの時期に行われるべき活動<sup>5</sup>として、探査は非常に各国とも注視していく活動であると、そう云う認識では、一致しております。

松尾:有難う御座います。

---

<sup>5</sup> 此れが最も重要なキーワードであろう。米国、中国を除く、世界各国は、「予算を突出させたくない。」または、「大きな予算額など期待できない。」と考える一方、「の独走を許すわけにはいかない。」ことも重視して、其の落とし処を探っているのであろう。ISSの費用負担が小さくなると共に、探査の実作業に熱が入って来るのではないかと。

この時、日本が随いて行けるまでに、計画の進捗を減速させるよう、外交の技量を磨く(または投入する)ことが必要なのではないだろうか。